

同志社って、誰がつけたの？

|       |                                  |
|-------|----------------------------------|
| 奨励    | 鈴木 直人〔すずき・なおと〕                   |
| 奨励者紹介 | 同志社小学校長<br>同志社大学文学部教授            |
| 研究テーマ | われわれを取り巻く環境および感情を喚起する刺激が生体に及ぼす影響 |

毎日のように、ダビデを助ける者が加わり、ついに神の陣営のような大きな陣営ができた。

（歴代誌上 一二章二三節）

山本覚馬を知っていますか？

皆さんは、山本覚馬という人物を知っていますか。山本覚馬は、新島襄、J・D・デイヴィスとともにこの同志社を作った人です。新島八重のお兄さんでもあります。若王子の共同墓地の左手奥に山本覚馬の比較的大きなお墓があります。しかし、なぜかあまり同志社で山本覚馬について話されることはないように思います。

ご存じのように同志社の建物にはすべて名前がついています。補修工事を終え、五年がりに姿を見せたこのクラーク記念館、そしてハリス理化学館、本部のある有終館、至誠館・弘風館・アーモスト館、中学校の彰栄館、女子大学の栄光館・ジェームズ館、京田辺キャンパスのデイヴィス記念館・ラーネッド記念図書館・知真館・有徳館・医心館、などなど、建物ではありませんが、寒梅館にはハーディーホールやクローバーホールなどがあります。

こうした建物の名前やホールの名前は、すべて聖書の一節や、あるいは同志社にゆかりのある人たち、あるいはものの名前からつけられたものです。ところが、同志社を新島襄やデイヴィスとともに作った山本覚馬の名前をつけた建物、施設は同志社のどこにもありません。

私が校長を務めている同志社小学校の建物の名前はご存じでしょうか。明心館です。明るいいの館と書きます。私は、山本覚馬の同志社に果たした役割の大きさを考え、小学校の建物の名前を「覚馬館」にしたかどうかと提案しましたが、多くの皆さんの賛同を得ることができず、「明心館」の方がよいということで、明心館という名になりました。

後から知ったことですが、山本覚馬は当時の京都の小学校の建設にも尽力していたようです。このことをその当時知っていれば、皆を説得できたのにと、自分の浅学が悔やまれてなりません。

竹林熊彦は大正十年の『同志社時報』一九一号の中で、「盲目の偉人 山本覚馬翁一管見を読む一」の冒頭で次のように述べています。

『同志社沿革略』の巻頭に曰く、「明治七年新島襄氏米国より帰朝し、翌年地を京都にト（ぼく）し、山本覚馬氏と共に同志社を創立し、米国宣教師デビス氏の賛助を得て十二月二十九日、同志社英学校を寺町通丸太町上る松蔭町旧高松邸内に開く、之を同志社の濫觴（らんりん）とす」と。見るべし、わが同志社の創立には三個の人物を必要とした、而かも新島先生を崇拝するものは多く、デビス先生を尊敬するものは多きも、わが山本翁に至っては同志社二千の学徒、果して何人かよく其の事蹟と性行との片鱗だも捉えたものがあらうか。学祖の義兄として、其の永逝去後臨時にせよ第二代総長の椅子にあつた翁の地位は、今少しこれを重視すべきであるまいか。

私の不勉強の所為かもしれませんが、前の竹林熊彦の文章にもあるように、山本覚馬の名前はあまり聞きません。現在、学生のなかで山本覚馬の名前だけでも知っている者が何人いるでしょうか。デイヴィスはもちろん、徳富蘇峰や蘆花兄弟、海老名弾正などはよく語られるのに、山本覚馬はあまり話題になりません。

なぜなのでしょう。私には不思議でなりません。山本覚馬はひょっとしたら、新島よりも早く死んだためであろうかと思って調べてみますと、新島が一八九〇年一月二十三日永眠、山本が一八九二年十二月二十八日永眠、すなわち新島よりも三年近く遅れて亡くなっています。新島がキリスト教に基づく英学校を開校しようとしたとき、彼を助けたのは当時京都府の顧問をしていた山本でした。

山本と新島の出会い

河野に昭先生が一八九〇年に「新島襄と山本覚馬―京都の近代化・同志社」と題して、人文科学研究所の新島襄先生永眠百周年記念講演会で話された内容が『同志社時報』の第九十号に載っています。山本と新島の出会いはそこに詳しく載っていますので、興味のある方はそちらをお読みください。

山本覚馬は、相国寺近く御所の北にある自分の所有地、京都御所と相国寺の間の桑畑、六五〇〇坪を同志社のために寄付してくれたのです。この場所は、薩摩藩邸の跡地で、安く売りに出されたのを山本が購入したものでした。これが今の同志社大学今出川キャンパスです。ご存じとは思いますが、今でも西門の外に、薩摩藩邸跡という碑が立っています。

山本覚馬は会津藩（今の福島県の会津市）の出身の武士で、会津藩の砲兵隊の隊長をしていました。その当時、蛤御門の戦い、鳥羽・伏見の戦いなど、薩長を中心とする新政府軍と会津藩を中心とする幕府軍の戦い、いわゆる戊辰戦争があり、山本は新政府軍に捕まり、薩摩藩邸に幽閉されてしまいました。つまり、山本が購入した薩摩藩邸の跡地というのは、かつて自分が閉じ込められていた場所だったのです。もっとも、当時のことを書いた本を見ても、牢屋に入れられていたというわけではなく、実際には本を読んだり、碁を打ったりなど結構自由であったようです。また、一緒に会津藩の者も捕らわれていたようですので、軟禁されていたというのが正しいようです。この間に山本は目の病気を患い、ほとんど目が見えなくなってしまいました。

アイデアマンであり、憂国の士でもあった山本は、この軟禁中に『管見』を口述し、同じく軟禁されていた野沢鶏一という会津藩士に筆記させました。この内容は、隙あらば我が物にしようとする列国ににらまれている我が国の情勢を説き、何を行うべきかという施策を二十カ条にわたって述べたものでした。この山本の優れたアイデアを書き綴った『管見』がきっかけとなり、戦いが終わってから、京都府知事の横村不二麻呂の懐刀、知恵袋の顧問をして働くことになったわけです。

新島が、学校をつくらうとした明治時代の初めは、キリスト教に対する理解がなく、日本でキリスト教の学校をつくるのは非常に難しいことでした。新島は、はじめキリスト教の学校を大阪につくらうとしましたが、当時の大阪府の知事に学校をつくるのは賛成だが、キリスト教の学校はだめだと断わられてしまい、いわば暗礁に乗り上げた状態でした。

学校をつくりたくてもつくる場所のない新島は、勝海舟に、「京都でぜひ山本覚馬に会いなさい」と言われたのを思い出し、山本に会うために京都に出掛けました。山本は、新島の話熱心に聞くと、「私の土地にあなたの理想の学校を建てなさい」と言って土地を提供しました。京都はお寺や神社が多く、もともと仏教や神道の強い土地ですので、キリスト教の学校をつくるということには当然のごとく大反対がありました。並大抵のことではなかったはずですが。

「われら同志の者」

アメリカンボードが日本につくらうとしたのは、英語や近代科学を教える学校ではありません。これなら大阪でも京都でも大歓迎です、ただし、キリスト教を教えることはまかりならぬというわけです。新島も、山本も、つくりたかった学校は、宣教師を補助する聖職者をつくらうとしていたアメリカンボードの意図とは違い、キリスト教をベースに置いた、近代科学を教える学校でした。新島は、同志社の「正課の中では」キリスト教を講義しないという京都府の条件を受け入れ、同志社が開校することになりました。表面上は、京都府も大歓迎の外国人が近代科学を教える英学校、しかしその実態は、その近代科学の講義だけでなく、その学問と密接に関係するキリスト教をも課外で教える学校でした。

河野先生によると、山本が、新島にキリスト教学を正課の中では教えない、しかし課外教育で教えるには何も問題はないという裏技を伝授したのではないかと匂わしているらしいんですが、私もそうであったろうと思います。だからこそ、アメリカンボードから派遣されているデイヴィスも山本と会い、おそらく山本の真意を確かめ、ゴーサインを出したのではないかと思います。こうした政府や京都府との交渉に、山本が京都府の顧問をしていたこと、またその後初代京都府議会議長を務めており当局に対して太いパイプをもっていたことは設立時、草創期の同志社にとってどれほどの力になったかは想像に硬くないと思います。

ある日、山本と新島が、学校を作るにあたって、設立の趣意、生徒募集の刷物を作らうとして相談しているとき、山本が「われら同志の者、文学の隆盛せんことを望み、社を結び、英学校を開き、これを名づけて・・・」という文章を作りました。講談風に言えばこのとき、「同志の者、社を結び、同志の者、社を結び・・・」と山本はその言葉を何度もつばやき、手に持っていた扇でひざをポンと打ち「どうでしょう。同志社は」それを聞いた新島はゆっくりと「同志社」と口にだし、「同志社、よい名です。山本さん」と言い、筆をとり、「同志社」と力強く書いたそうです。同志社という名はこのように山本の文章から生まれました。なお、同志という言葉は中国の「同徳則同心、同心則同志（道徳を同じくするものは心が同じであり、心を同じくするものは志も同じである）」という言葉からとられたようです。今日ここに同志社があるのも、一三〇年以上前に、輝くビジョンをもった新島襄の偉大さとともに、これを助けた山本覚馬の存在の大きさを決して忘れてはいけないと思います。

人の助けは

神様からの助け

先ほど読んだ聖書に、ダビデが王となったとき、「毎日のように、ダビデを助ける者が加わり、ついに神の陣営のような大きな陣営ができた。」とありましたが、人の助けは神様からの助けです。神様はいつも、よき企てにはよき協力者を与えてくださいます。同志社が、多くの人たちの助けによって今日あるのをもう一度心に留めたいと思います。冒頭の竹林熊彦の文章の続きです。

思ふに戊辰の変を中心として、幕末より明治維新に至る政変の千波万波のなかに、翁は千変万化の閱歷をした。主家の没落、牢獄の苦、白刃の下を潜つたのも幾度か、而かも盲目なりし翁の心眼いよいよ冴えて、其の広い趣味と深い造詣とは、最初の京都府会議長として、疏水工事の賛助者として、「明治文化の先駆者たる京都」の背後には翁の姿がまざまざと認

められる。予は信ずる、同志社が普通学の教授に甘んぜず、神学の範囲に囚はれず、政治に法律に経済に文学に、専門学の分野を開拓せんとした当年の勢いのうちには、翁の意見の確かに存したことを。

一言お祈り申し上げます。

見えざる手で私たちを導いてくださる神様、いつもあなたによって見守られ、支えられていることを覚え感謝いたします。今日という日が終えようとしている今、同志社のシンボルともいうべき、新装成ったこのクラーク記念館のチャペルで、静かなチャペル・アワーのひとときがもてましたことに感謝いたします。

昨日から、同志社の精神を学ぶ試みである、スピリット・ウィークが始まりました。同志社に関わるものたちが皆、同志社の精神を今一度見直し、考え、そしてそれを実行していくことができますようお導きください。

今日は、新島襄とともに同志社を作るのに多大な援助を惜しまなかった山本覚馬について学びました。あなたが、新島襄に山本覚馬お遣わしになられたように、この同志社にも、そして、私たち一人ひとりにも、あなたがさまざまな人びとをお遣わしくださっていることを覚えます。どうかこれからも、同志社に、また一人ひとりの上にあなたの御手を置いてお支えください。この祈りを一人ひとりの心の内の祈りと共に、主の御名により御前にささげます。アーメン。

二〇〇八年六月三日 同志社スピリット・ウィーク  
火曜チャペル・アワー「奨励」記録